

■研究論文

浦辺史が目指した学び②

— 『新興教育』の編集と執筆 —

中山 佳寿子

1. はじめに

浦辺史は戦前、戦後を通して保育運動を牽引した保育研究者である。浦辺は1933年3月に東京帝国大学セツルメントの専従職員となり、初めて保育実践に取り組んだ。東京帝国大学セツルメント時代について浦辺は、手記『道づれ』（1982）で「保育に開眼をした¹」と回想している。浦辺の保育観には保育実践に取り組む前の、小学校での教育実践と新興教育運動という二つの経験が深く関与している。前者については既に「浦辺史が目指した学び① ～教師時代の共同生活が与えた影響を中心に～」(中山, 2019)において取り上げ、新教育的な教育実践と同僚との共同生活によって、浦辺が学びと民主主義は不可分のものであるという信念を形成していく経緯を描出した。本稿では後者の、特別高等警察による逮捕²で教壇を追われた後の浦辺が、新興教育研究所の所員となり教育運動に身を投じた時期（1931年7月～1932年10月³）を検討する。当該時期は東京帝国大学セツルメントへの入職直前の時期であることから、浦辺の保育実践を検討する上で重要な意義を持つ。本稿では、浦辺が『新興教育』で執筆した記事7本の考察を通して、新興教育研究所の組織的困難と矛盾、教育運動と大衆の乖離による苦悩が、次の東京帝国大学セツルメント託児所における地域共同と保育実践の礎石となったことを示す。

戦後、浦辺は新興教育研究所と「教労」（日本教育労働者組合）の活動を検討し、その評価が客観的に正しく行われることが、「戦後の民主化のために」役立つと述べている⁴。浦辺の関心は新興教育運動の限界の検証にあった。

浦辺が新興教育研究所の所員となった当初から運動が成功へ向かっていると考えていなかったことは、「何故浮び上がるか⁵」や「残された俺たち⁶」を見れば明らかである。新興教育運動を阻む原因は政府からの弾圧だけでなく、運動の手法や組織内部の問題にもあると、浦辺は参加当時から認識していた。

1-1. 日本教育労働者組合と新興教育研究所

新興教育研究所について触れる前に、岡野正「日本教育運動史研究：1930年代の動向」（1973年）⁷、柿沼肇『新興教育運動の研究』（1981年）⁸の論述に基づき、日本教育労働者組合について概観する。

日本教育労働者組合は、1920年代後半、青年教師による文芸グループが各地に散発的に生み出されるなかで生まれた。1927年に青山師範学校の卒業生の教師を中心に結成された文芸集団である「義足」同人は翌年青年教育家連盟へと名前を変え、それとともに「義足」は廃刊となるが、1928年には同じく東京八王子で「分教場」グループが生まれた。「分教場」には、「義足」同人の野津一郎と山口近治、町田友雄や増渕穰、浦辺史など八王子と南多摩の若い教師が参加していた。「義足」同人の後身である青年教育家連盟は、教育ジャーナリスト上田唯郎や池田種生を中心として神

奈川、山梨、埼玉など近県の教師らと連携し、1928年10月に教育文芸家協会の結成へと向かった。教育文芸家協会がさらに1929年5月に教文協会と改称し、同時に、教員組合結成への動きを開始する。なお、文部省学生部『プロレタリア教育運動』第二章第三節「エドキンテルンとの関係」⁹によれば、教文協会は、フランス留学中の浅間研真を通じて1929年8月に教育労働者インタナショナル（エドキンテルン）への加盟を果たしたとある。

教文協会（教育文芸家協会から改称）は1929年10月、小学校教員連盟（「小教連」）へと発展したが、同年年末から翌年にかけて大規模な検挙があり、1929年3月には増渕穰や山口近治を含め13名が解雇され、他の者も「けん責処分」を受けた¹⁰。大打撃を受けた小学校教員連盟は、合法的組織を目指して、かつて日本教員組合啓明会の指導者であった下中弥三郎を委員長として、全日本教員組合準備会を組織した（1930年5月）が、教員の生活安定や地位向上を主旨とする会合はもはや弾圧を免れず、二カ月ほどで活動を停止する。そして合法的な教員組合の実現が困難であるという認識のもとに組織されたのが、1930年8月、非法な日本教育労働者組合準備会とプロレタリア教育の研究とプロレタリア教育の浸透という合法的活動を目的とする新興教育研究所であった。

つまり、新興教育研究所と日本教育労働者組合準備会は1930年8月に生まれた時点で、「表裏一体」の関係を前提としていた。新興教育研究所という表舞台には山下徳治、浅野研真、池田種生などが立ち、日本教育労働者組合準備会というバックヤードには増渕穰や山口近治など小学校教師を誡首された者が多くいた。後者の日本教育労働者組合準備会は同年11月に結成大会を開催し、日本教育労働者組合を組織した。

新興教育研究所は、当初から二つの組織矛盾をはらんでいた。一つめは「表裏一体」という関係性が新興教育研究所にもたらず運営に関する矛盾であり、二つめは設立メンバーである山下徳治と浅野研真の考えの違いからくる理念的な矛盾である。

一つめの「表裏一体」は、新興教育研究所と日本教育労働者組合という二つの組織の密接な連携によって保たれていた。組織をつなぐ「結節点」（柿沼、2006）¹¹の役割を果たしたのが新興教育研究所内の「教労フラクション」（浦辺、1982）¹²の浦辺と小田真一で、日本教育労働者組合の意向をくみながら、表向きは新興教育研究所の所員として活動した。

二つめの組織矛盾は、実践経験のある山下徳治と理論研究中心の浅野研真の間の、教育研究についての認識の開きに始まっている（黒滝チカラ、1977）¹³。非法とされる労働運動を匿う、という負の立脚点から生まれた新興教育研究所は、いわば宿命的に矛盾をはらんでおり、浦辺が新興教育研究所の所員となった1931年7月¹⁴には組織の末端である『新興教育』読者や小学校の現場に、すでに顕在化していた。

1931年夏頃から日本教育労働者組合と新興教育研究所との間に、『新興教育』について「見解の相違が生まれた」のは全日本無産者芸術連盟の影響もあった¹⁵。1931年12月から翌年1月にかけての討議の末、新興教育研究所は日本教育労働者組合から「独立」し、教育サークル活動を基礎とした大衆的文化団体、新興教育同盟として再組織化を目指す方向へと動き始めたものの、対立がおき、実際に新興教育同盟準備会が結成されたのは1932年の8月25日であった¹⁶。つまり、一年もの間『新興教育』をめぐる、日本教育労働者組合と新興教育研究所は不安定な関係にあった。

井野川潔（1975年）は「新興教育」を「プロレタリア教育の別称」¹⁷と定義しているが、新興教育研究所創設者、山下徳治は『新興教育』創刊号（1930年8月）で「新興教育」は「社会教育」

であるとともに「プロレタリア教育」である¹⁸、としている。山下によれば「資本主義制度」の「個人主義」のもとでは「社会教育は存在し得ない」。また、「プロレタリア教育」の任務は「資本主義組織の中に隠された教育の社会性を明るみに出すための政治的闘争」である。また、山下は「新教育」を「児童中心主義の教育」であり「児童の我儘を擁護する、最も純粋なる教育の無政府主義の制度」と批判し、「新興教育」との差異を強調している¹⁹。

つまり当初目指されていた「新興教育」は「プロレタリア教育」と「社会教育」を包含する教育の理念であり「資本主義制度」との「政治闘争」であった。本稿では浦辺がこの時代に経験した「新興教育」を捉えるため、山下の定義に拠ることとする。

ただし、当時も「新興教育」という言葉は、厳密な定義を有するものとして使用されていなかった。山下とともに新興教育研究所の設立に関わった池田種生（筆名野上壮吉）は、機関誌の名前を山下と二人で決めた時のことを、「プロレタリアでは、少しきつすぎてかたよった感じがして、教員大衆には距離がありすぎる」という理由で、山下の著書『新興ロシアの教育』から「新興」を取ったと『プロレタリア教育の足跡』（1971年）で回想している²⁰。「新興教育」も「プロレタリア教育」も言葉の強さの違いはあるにしても、軍国主義へと向かう公教育への対立概念を総称する言葉として用いられていたことには違いなかった。

1-2. 研究方法

本稿では、浦辺および関係者の手記、『新興教育』の執筆記事、文部省の資料を中心に検討し、新興教育運動時代の浦辺の活動と背景にある思想の関連を明らかにする。手記として、戦前に執筆されたものでは、「文部省思想局左傾学生生徒の手記」²¹があり、戦後に書かれた手記では「社会的目覚め即失業」（1956年）、「川田由太郎と新興教育」（1971年）、「道づれ」（1982年）²²、『福祉の昭和史を生きて』（1994年）がある。また、戦後の対談では、「子どものいのちと発達をまもる保育運動—浦辺さんを囲んで治安維持法下の活動をきく」（1976年）²³がある。

「文部省左傾学生生徒の手記 七一」²⁴は、1932年10月の検束後、留置所で強いられて書いた「手記」であるため、資料としての取り扱いに注意を要する。拘束時の手記は通常、自らの釈放を求めて綴るため、虚実入り混じっている。しかし浦辺の「文部省左傾学生生徒の手記 七一」の場合、虚は小学校教師時代の人間関係と「教労」との関係、新興教育研究所の活動の詳細に集中し、叙述された心情や思考には偽りがほとんどないと、戦後の他手記との照合から考えられる。結果的にこの率直さが仇となり度重なる逮捕につながったと、浦辺自身も戦後の手記「行為なきを罰す」（1976年）²⁵で回顧している。戦後、当時を振り返って綴られた手記として「川田由太郎と新興教育運動」（1971年）²⁶がある。川田由太郎は『新興教育』記事執筆時の浦辺の筆名である。この手記は「左傾学生生徒の手記」とは異なり、新興教育運動の内実が詳細に叙述されている点が特徴である。対談「子どものいのちと発達をまもる保育運動」（1976年）も浦辺、増淵穰、菅忠道、小田真一などの新興教育運動のメンバーによる対談であり、当事者それぞれの立場からの見方を伝える資料として有用である。また、『新興教育』の背景と当事者については「新興教育復刻版月報」の記事および「関係者の証言」に詳しい。

ほぼ同時代に教壇に立っていた小学校教師の手記として、戸塚廉「新興教育同盟支部づくり」（1956年）²⁷、前田卯門「教員組合をつくって」（1956年）²⁸、池田種生『プロレタリア教育の足跡』（1971年）²⁹、山口近治『治安維持法下の教育労働運動』（1977年）³⁰、増淵穰『日本教育運動小史』（1972年）

の五人のものを中心に参照した。池田、山口、増淵の手記にはいずれも多くの新興教育研究所に関する資料が含まれ、単なる手記以上の価値を示している。戸塚、前田、池田、山口、増淵は、いずれも小学校教師時代に機関誌『新興教育』に影響を受け、新興教育運動に参加したという点で、浦辺と共通性がある。

1-3. 先行研究

この時期の浦辺を扱った先行研究としては、岡野正「日本教員組合運動史研究 -1920年代の動向-1-」(1971年)³¹「日本教育運動歴史研究：1930年代の動向」(1973年)³²、柿沼肇『新興教育運動の研究』(1981年)³³、「浦辺史とその教員時代 —ペスタロッチへの傾倒から『教育労働者』へ」(2005年)³⁴、「浦辺史と新興教育運動 —子ども・教員の解放と社会の変革をめざして—」(2006年)³⁵がある。

岡野正(1971年)は、教育運動史のなかで浦辺に触れ、『新興教育』記事「学校自治会活動の自主化」により、読者に「生活指導」の必要性を訴えた主要な例としてあげているに³⁶。

柿沼(2006)は、『新興教育』に掲載された浦辺の執筆記事7本及び手記に言及し、浦辺を「組織的な活動のうえで重責を果たし」「運動に大きな貢献をした」と評価した。柿沼の研究と本研究の相違点は、柿沼が浦辺を、新興教育運動に献身的に尽くした人物として捉えるのに対して、本研究は浦辺を新興教育研究所と日本教育労働者組合の狭間で矛盾に苦しみ、迷いと複雑な思いを持って新興教育運動に参加した元教師として捉える点にある。浦辺の複雑な思いは、新興教育研究所の所員となった直後に執筆された記事「何故浮び上るか」(1931年)に綴られた新興教育と大衆の解離への懸念や、戦後の手記『道づれ』(1982年)において、浦辺は新興教育研究所に「職業的」に参加したと二度も記し、『新興教育』の記事「教育サークルと新興教育同盟」を「せまられて」執筆した、と述べていることから明らかである。

本研究では、新興教育研究所と日本教育労働者組合の接合面で活動し、新興教育運動の持つ矛盾や課題を発見する浦辺の姿を追う。本研究が新興教育研究運動に対する浦辺の葛藤を焦点化するのには、この時期の迷いと複雑な思いが、次の東京帝国大学セツルメント時代に、託児所における保育実践や保育理論の形成へとつながっているからである。

2. 新興教育研究所での役割

浦辺の所属した新興教育研究所の「組織部」は当初、外面的にはもちろん、新興教育研究所のなかでも非公然とされた³⁷。これは実質上、「組織部」が非合法組織である日本教育労働者組合の一部門であったという事情による。新興教育研究所の創立当初から関わった池田種生が述べるように、研究所内の所員、研究者同士であっても、書記局と組織部の間には「教労のカーテン」が存在していた³⁸。

ここでの仕事は、主に三種類あり、一つめは松本良夫(浦辺の組織部での名³⁹)宛てに送られてきた地方の支局から読者からの通信や誌代の処理、二つめは『新興教育』の発送と配布、三つめは新興教育研究所内の「「教労」フラクション会議」への出席である。通信は記事化し編集部へ届け、誌代は書記局に届けるという業務だった。『新興教育』を見ると、1931年7月号以降は購読料の支払いの宛先が「松本良夫」と掲載されており、浦辺が7月には新興教育研究所内で業務を開始していたことが確認できる。

柿沼肇は「浦辺史と新興教育運動 ―子ども・教員の解放と社会の変革をめざして―」（2006年）において、浦辺が所属した組織部は日本教育労働者組合と新興教育研究所の「結節点」⁴⁰であるばかりでなく、『新興教育』読者と支局を結ぶ橋であったと述べ、組織部が弾圧の標的となれば、読者名簿や組織図が当局の手にわたり、組織ごと殲滅される危険が予想された、と述べている。浦辺は「川田由太郎と新興教育運動」（1971年）で「新教の文化活動や教育研究部門の担当者たちとちがって、表面には出なかった」と振り返り、また、『道づれ』（1982年）でも「組織部は研究所の規約にも機構図にもその名称はなく、全く非公然であったから研究所の中央委員会にも書記局会議にも出席したことはなかった」と回顧している。組織部は秘密裡の存在であった。浦辺は当局の手を逃れるため、わずか1年5カ月の間に、6度転居している。

ただし、極秘とされた「組織部」も浦辺が逮捕された1932年10月頃には当局に正確に把握されていたことが、文部省学生部『プロレタリア教育運動』で確認できる。同資料には1932年11月までの経過が新興教育から押収した資料とともに掲載され、翌年4月に刊行されている。編集と印刷期間を考慮すると当局が3、4ヶ月程の時間差で情報を入手していたことが推察できる。

新興教育研究所については、組織の変遷、構成員とそれぞれの変名、「組織部」が「教労」の「フラクションとしての活動」を行っていることなど、ほぼ丸裸の状態であった。同資料には、浦辺が「坂井」という変名で活動していることのほか、「坂井」の同研究所における担当や働きも詳細に記載されている。

第二期の始まりにあたる1931年7月、新興教育研究所は「組織的転換」をして新興教育同盟準備会となった。ここで浦辺は書記局員、さらに翌月に書記長代理に就任している。『プロレタリア教育運動』（1933年4月）には、浦辺の業績が以下のように記述されている。

昭和六年八月から九月にかけての東京、神奈川、埼玉の各地方の教労メンバーの検挙により、教育労働部は一時壊滅したが、研究所の浦辺、田部等はその時も教労の再建を企て大に活躍し、遂に単独教育労働者組合独立の準備期間としての教育労働部書記局結成までも為し遂げた。此の如き状況があったればこそ研究所の活動は恰も教育労働者組合の調査部の如き観を呈するに至つたのである⁴¹。

浦辺自身の手記からは、指導的役割を果たしたのは1932年8月の「新興教育同盟準備会」結成のあたりからであると読み取れるが、文部省学生局は1931年の秋以降から「大に活躍」していたと捉えていたようである。

新興教育研究所の専従として「活躍」する一方で、浦辺の生活は、雑誌配布に行った先で「現場の教師からのカンパ」をうけて糊口を凌ぐ（浦辺、1982）⁴²というような貧しく不安定なものであった。検挙を警戒し引越しを6度も繰り返しながら、記事執筆と新興教育研究所の役職を五役こなすという、八面六臂の働きに浦辺を駆り立てたのは、「農家の貧困をまともにうけた子どものいたましい現実に、じっとしていられなかった」⁴³という思いであった。

浦辺は新興教育運動のなかで、保育と初めての接点を持った。新興教育研究所は「就学前教育研究会」をつくり、ソビエトの教育実験を共に学び無産者託児所の創設を提唱する⁴⁴など、東京交通労働組合、無産者労農救援会、文化連盟が取り組んだ無産者託児所設立の促進を理論面で支えた⁴⁵。同研究会への参加は、浦辺と無産者託児所の関わり方の端緒となる出来事であった⁴⁶。

3. 『新興教育』記事にみる浦辺の考え

3-1. 執筆記事について

この時期に発表された執筆記事は、7本である。浦辺自身が自分の業績をまとめた『日本の児童問題』巻末年表によれば以下ようになる。

表1 1931年～1932年の浦辺執筆記事

発表年・月	タイトル	雑誌名	筆名
1931年8月	東京の同土諸君に訴う	新興教育	浦辺史
1931年9月・10月	何故浮び上るか	新興教育	川田吉太郎
1931年11月	残された俺たち	新興教育	川村守三
1931年12月	学校自治会の自主化!	新興教育	川田吉太郎
1932年1月	自主的父兄委員会を作れ	一般使用人組合教育労働者版	署名なし
1932年2月	ふたいろの先生	ピオニール読本	大野健一
1932年3月	教育サークルと新興教育同盟	新興教育	川田由太郎

上記の表のとおり、新興教育研究所の機関誌『新興教育』記事が5本、新興教育研究所が発刊した少年向け雑誌『ピオニール読本』記事が1本、一般使用人組合に同流した日本教育労働者組合（「教労」）の機関誌の記事が1本である。このうち、一番最初に掲載された「東京の同土諸君に訴う」は、浦辺が教壇を追われた後、府下の小学校に送付した「声明書」である。

浦辺は『新興教育』の編集に携わり、多くの記事を書いたが、同誌の内容に必ずしも賛同していた訳ではない。新興教育研究所に入所する前の五日市小学校教師時代に「もっと現場の教師が要求するような、地道な実践をのせてほしい」と編集部に「再々」要求していた（井野川、1975）⁴⁷。浦辺が編集に加わった時点においても『新興教育』は「『プロレタリア教育の啓蒙宣伝』の域をさほどぬけ出すものとはなっていない⁴⁸」状態であり、現場の教師の意識とは離れたものとなっていた。

注目すべきは、浦辺とともに『新興教育』の編集に取り組んだ松永健哉や村島雄一、同誌の記事をたびたび執筆した菅忠道は、東京帝国大学セツルメントの運営に携わる学生でもあった点である。彼らは新興教育運動以降も、浦辺を次の活動の場、東京帝国大学セツルメントに引き入れるなど、浦辺と深い関わりを持ち続けた。

3-2. 新興教育の学習、連帯に関する記事

「学校自治会の自主化!」記事は児童の自主的な組織づくりの必要性を訴える記事である。浦辺は、支配階級が学校を利用して、子どもたちに「ブルジョア道徳」の刷り込みすなわち「反動教化」を行っていると批判し、「児童をまもり、正しく教育するためには児童の自主的な活動機会がどうしても必要」と説いている。「自主的な活動機会」は、子ども自らの手で組織された「学校自治会」を指している。この記事で浦辺は、学校自治会が「イニシアチブを発揮」して「巧みに強力な闘争を展開」した好例として、自身が経験した七生村の潤徳小学校同盟休校事件をあげている。しかし、潤徳小学校の同盟休校も、不当配転の撤回には失敗しており、限界はあった。

この限界を乗り越える方策が、「学校自治会の自主化!」記事の二か月前の「残された俺たち」

記事に提示されている。学校自治会のみでは子どもたちの運動はすぐにつぶされてしまうため、子どもを「指導し援助する大人の力⁴⁹」が必要である。大人の力を喚起するための地域の「貧農青年又は父兄への働きかけ」は、浦辺が潤徳小学校で体得した知識であった。

同記事に限らず、浦辺の執筆記事の多くは、浦辺が小学校教師時代に経験した体験に基づいて綴られており、概念的な文言が少なく記述は具体性に富む。この点は、『新興教育』に掲載された同テーマの記事、例えば和田一夫の「文化サークルについて」と「教育サークルと新興教育同盟」で比較してみると明瞭である。

『ピオニール読本』の記事「二いろの先生⁵⁰」にある「戦争は何故起こるか、戦争して得をするのは誰か」も「二色」の人間の話も、実際に浦辺が五日市小学校教師時代に子どもたちへ語った物語であった⁵¹。同記事で浦辺は子どもたちに教師にも厳しい目を向けるよう伝え、「国のために戦争にでかけて死ぬことをよいことだと教えたりする」教師を「犬先生⁵²と形容している。

「学校自治会の自主化！」記事に話を戻す。同記事においては、前述の潤徳小学校同盟休校事件以外にも、数多くの実体験が綴られている。「自治会自主化」については潤徳小学校の実践、「プロレタリア貧農児童」へのインフォーマルな教育方法については、潤徳小学校と五日市小学校における実践をもとにまとめられている。

後者について浦辺は、家計のため放課後も忙しく勤労している貧農児童に校外で教育を施すことは困難であるが、自宅に招いたり山で会合を持つと「十分教化訓練することができる」と述べている。実際にこの方法で五日市小学校の子どもたちは「だんだん階級的なものの見方をするようになった⁵³」のであるから、効果的であったことは間違いない。しかし、浦辺はこの実践を行っていた当時、プロレタリア教育やピオニールに対して明確な意識を有していなかった。

浦辺は退職させられるまでは新教育に学び生活綴方に熱中する教師⁵⁴に過ぎなかった。浦辺が子どもに「階級的」な視点を教えたとしても、新興教育運動の主張する「個人主義」「児童中心主義」「新教育」の対立軸としての「プロレタリア教育」に沿ったものとはいえなかった。浦辺が最初の赴任地である浅川小学校時代にペスタロッチへの憧憬を抱いたことは、当時の「東京の同土諸君に訴う」（1931年）、「文部省左傾学生生徒の手記 七一」（1934年）でも、後年の『道づれ』（1982年）や『福祉の昭和史を生きて』（1994年）で繰り返し叙述される通りである。浦辺は浅川小学校で貧しい子どもたちの生活に心を痛め、教育で社会を変えるというペスタロッチに望みを託した。農村の「痛ましい現実」はペスタロッチの知りえなかったものではないか（浦辺、1931）⁵⁵、と考えるようになった頃、浦辺は増渕穰との共同生活によって、マルクス主義へ興味を高めた。その一方、『道づれ』（1982）で回想する通り、浦辺の教育実践は変わらず新教育の影響下にあった。

つまり、五日市小学校時代の「社会を真実にみよう」とする眼差しを育むことにより子どもを「よりよい未来」へと誘うという浦辺の教育実践において、プロレタリア教育と新教育は溶け合い、対立を起こしていなかった。これは浦辺だけでなく、新興教育同盟の静岡支部をつくった戸塚廉も同じである。戸塚の「生活教育」が新教育を発展させた実践であることは、戸塚の手記「『新興教育同盟』支部づくり」（1956年）に明らかである。

「学校自治会の自主化！」記事は、浦辺の小学校教師時代の実践がそのまま転用されたのではない。小学校での教育実践が「新教」の「学校自治会活動の組織化方針」の折に「生きてきた」（柿沼、2006）⁵⁶のではなく、歪めて再利用されたのである。浦辺が子どもとの触れ合いにおいては常に成功をおさめたのは、教育の目的が一人ひとりの子どもの幸せを願うものであったからであり、自己

目的化した新興教育運動のプロレタリア教育では再現不可能であった。「学校自治会の自主化！」記事には、新興教育の「プロレタリア教育」と浦辺自身の教育実践の矛盾が見え隠れする。

「教育サークルと新興教育同盟」記事はその前号で発表された長田完治の「『新興教育研究所』の新しき任務及び組織方針について」を踏まえ、長田記事の内容を補いながらさらに教育サークルの具体的な活動や展開法について解説している。

「教育サークルと新興教育同盟」記事は、「教育サークル」を、演劇サークルやスポーツサークルと同じ「文化サークル」の一つであり、「ブルジョア小学校、公民学校（補習学校）、青年訓練等の制度、内容、人事等の諸問題によって啓蒙活動をする」ためのものであるとしている。具体的には、教育労働者の研究グループ、「無産青年」が通う補習学校の「座談会」や「巡回文庫」、母の会、保育関係者の研究会、師範学校の学生の研究会などで、これらの「教育サークル」は、運動の大衆への浸透を企図した戦略であるため、統制の取れたトップダウン式の組織ではなく、参加者の緩やかな横の結びつきが構想された。例えば、新興教育同盟と「表面上はなんのつながりもない」として組織され、楽しみや知的な興味で人々が広がりをもって関わる場とならねばならなかった。

「教育サークルと新興教育同盟」で目指されているのは、「下からの自主的な全国的な大衆的組織が作られる」ことである。教育運動家が急進的な主張を周囲に押しつけるが故に「浮かび上がる」という失敗を繰り返さないために、同記事は、多くの工夫を提案している。そのなかでも、特に顕著なのは、参加者の結びつきが緩やかな点、参加者の楽しみにも焦点を置いている点、下からの組織作りを強調している点、という3点である。

文部省が教育運動の多くの印刷物の中から「教育サークルと新興教育同盟」記事を選び、教育運動対策の書『プロレタリア教育運動』に記載したことは、同記事が教育運動で一定程度、効果的に機能していたことの証左ではないか。文部省は、同記事を11行にわたって引用し、教育サークルの手法によりプロレタリア教育運動の「活動範囲は非常に拡大される」という予想の根拠とし、「将来深甚の注意が払われなくてはならない」と危機感を示した⁵⁷。文部省は学生運動よりも教育運動をむしろ警戒したのは、大衆の現状を熟知した教師が、「あらゆる機会をとらえ、宣伝扇動と拡大強化を怠らない⁵⁸」からであった。つまり文部省が教育運動の強みだと考えていたのは、浦辺が同記事で提案したような、しなやかに農村の子どもや保護者の心に入り込んでいく手法であった。

実際には当局の弾圧によって、教育サークルは教育運動を後押しするまでには至らなかった。しかし浦辺がこの二つの記事「学校自治会の自主化！」「教育サークルと新興教育同盟」で示した組織作りについての3つの条件——①緩やかな結びつきであること、②活動に楽しみがあること、③下からの組織作りであること——これらは、東京帝国大学セツルメントの母の会や、天照園子供の家の保育実践にも継承された。

3-3. 「何故浮かび上がるか」への問題

浦辺は、新興教育研究所の活動の趣旨には共鳴する部分もあったが、活動のスタイルには大きな不満を抱いていた。この思いは、1931年9月という入所直後に発表された記事「何故浮かび上がるか」にあらわれている。

この記事は読者からの投書として掲載されており、内容は教育運動により周囲から「浮かび上がる」、つまり孤立する教師に対する助言である。助言は、①学級組織と無関係の「教化闘争を排すること ②観念的言辞を弄さず「真理はあくまで具体的である」ということを忘れないこと ③校長

と闘うのではなく、「下へ、大衆の中へ」主張を浸透させること ④校長の監視をそらすため、時折校長を招いて模範授業をすること ⑤グループを作っていることを校長に知られないようにすること ⑥読んでいる本を知られないよう注意し、教案簿は授業内容とは別に「忠君愛国的」に書くこと ⑦放課後は他の教員とスポーツ（レクリエーション）を進んで行ない親睦に励むこと の7つである。

7つの助言はそれぞれについての悪い例を示した後で、浮かび上がらないようにするための具体的方法を示す、という形式でまとめられている。悪い例については、浦辺が教師時代の自身の姿を振り返って書かれた可能性が高い。③はその一つである。浦辺は教師時代1校め、2校めでは校長との対立も厭わなかった。そのためにどちらの赴任先でも不意転の憂き目にあい、「教育によって悪い社会を変える⁵⁹⁾」という望みはそのたびに断たれた。「階級意識に目覚めたては職員会で得意になって多くしゃべりたがる」という辛辣な言葉には、浦辺自身への醒めた視線と怒りが表れている。

浦辺の宮原に対する「現場から浮き上がっている」という批判や「何故浮び上るか」記事は、一方では学生運動と同様の気分である宮原のような青年たちに向けられた言葉であると同時に、教師時代の自分に向けた浦辺の自己批判でもあったと考えるのが妥当である。

3-4. 新興教育運動に内在する問題と現場との乖離

「何故浮び上るか」記事の掲載が、浦辺が同研究所に入所した直後であることから、浦辺がほぼ直感的に新興教育運動の課題を把握していたことが分かる。この素早さは、運動にける期待と、すでに感じていた運動の限界という浦辺の思いの両側面を物語っている。浦辺が感じていた限界は主として三つあった。一つは、新興教育運動のコアメンバーと大衆の乖離、二つめは「目覚めた」教師たちと他の同僚、保護者たちの乖離、三つめは、本章の冒頭で述べた、新興教育研究所（後に新興教育同盟）と「教労」の不安定で複雑な関係である。

「何故浮び上るか」記事の7つの助言は、一つめと二つめの乖離の問題に向けられている。しかし記事を執筆したものの、浦辺が消化できぬ思いを抱いていたことは、「川田由太郎と新興教育運動」の「むずかしい教育運動」や、当時書かれた「文部省左傾学生生徒の手記 七一」の「組合活動は自分の苦悶している『貧農児童、欠食児童の教育を如何にすべきか』については何の指示も与えなかった」という言葉に表れている。

三つめの新興教育研究所と「教労」の複雑な関係について、戦後浦辺は1932年8月の新教同盟発足会までは「見解の相違があった⁶⁰⁾」と述べている。「教労は『新興教育』を教労のアジプロ誌と規定している」のに対して、「新教」側は『新興教育』を「独自性をもった教育誌として主張した」のである⁶¹⁾。この関係性のなかで新興教育運動は活動面においても理念においても常に、両者の間で激しく揺れ動き進むところではなかった。研究所のなかで大きな役割を果たすようになればなるほど、浦辺はこの揺らぎを組織内の矛盾として感じるようになった。浦辺は戦後、「教労」と「新教」の綱領に「あまりちがいが認められず現場の教師はとまどったことと思う」と述べているが、これは当時の浦辺自身の思いが投影された表現であるとも捉えられる。

新興教育研究所は組織内部の問題によって、合法的組織としての役割を見失い、「本来の合法性を自ら非合法へと追いこんでいく⁶²⁾」。池田の言を借りれば、新興教育運動は、現場教師への「心づかい⁶³⁾」を失い、「残酷なむくい」を強いる運動へと変貌したのである。子どもに愛情を傾け、「教

育の真理を追求」することを願う現場の教員にとって、教育運動は「極左的」な「理論や観念」によって「犠牲だけをしいられる」ものとなっていた⁶⁴。

新興教育運動の崩壊は当局の取り締まりが主因であることは間違いがないが新興教育研究所の中心的メンバーである池田種生も述べるように、性急に革命的要求を持ち込み、自ら非合法活動へ走り、「善意の教員大衆」を恐れさせ、現場との乖離が進んだということも無視できない⁶⁵。

現場との乖離は、新興教育運動の中心的メンバーの中に、高校生、大学生が多く含まれていたことと無関係ではない。例えば、東京帝国大学経済学部三年の時に運動に加わった帆足計は「新興教育のあけぼの」（1971年）で当時を振り返り、自らを「世間知らずの青年」であり「左翼運動の宿弊ともいべきセクト主義」「教育学のイロハも知らぬ紋切り型のマルクス・ボーイ」と述懐している⁶⁶。宮原誠一（1971年）の手記にもある、経済的に恵まれた「学生運動気分」の青年たちが「革命前夜のように思い込み」、「純粹に主観的に一途に」教育運動をがむしゃらに走り抜け⁶⁷ていったこと、帆足計（1971年）の述べるように新興教育運動が、「観念的公式主義⁶⁸」の方向へ運動を押し出していったことも、現場の教師と離れていった要因の一つであった。

家族の生活を背負って働く現場の教師の目には、新興教育同盟の活動方針は、より理不尽な、不合理なものとして映った。教育運動によって誠首にあった多くの教師が、後年その点を語っている。静岡県の教師で優れた教育実践を行うほか「消防組」や「青年団」を通して地域の民主化活動を行っていた戸塚廉もその一人である。

新興教育運動に対する見方は、当時から、学生、現場教師、教育ジャーナリストなど、立場によって様々である。さらに戦後は見方が分かれた。代表的なものとして、生活綴方運動と比較して新興教育研究所と日本教育労働者組合の教育運動を「極左はね上がり」と無効化する見方⁶⁹がある一方で、新興教育運動を戦前の軍国主義国家への抵抗運動としてその社会的意義を大きく評価する研究もあった⁷⁰。

前者の、国分一太郎⁷¹や駒林邦夫⁷²の新興教育運動に対する評価について、柿沼（2014）は「取り締りを任務とする当局側の資料を『鵜呑み』にしている」ため、「一面的、否定的」になったと批判している⁷³。前者については柿沼の指摘以前に、生活綴方運動と比較、対比した点で、破綻がみられる。浦辺も含めて、新興教育運動に関わった教師、元教師の中には、生活綴方を取り入れた教育を行ったものが少なくなかったため、対置させて論じることは出来ない。

但し、新興教育運動への批判的評価について、すべて一律に「官側資料」を「鵜呑み」にした「一面的」な見方である、と断ずることは出来ない。批判の論点はいくつもあった。浦辺をはじめとして、「新教」「教労」のコアメンバーの中にも複雑な思いを抱いた者は少なくなかったからである。

浦辺と新興教育運動の関わりを論じる上で注目しなければならないのは、当事者、特に小学校教師の経験があるメンバーの意見である。「新教」の創立から参画した教育週報社の新聞記者、池田種生も、前述の戸塚とともに批判的な見方をした一人である。池田もまた小学校教師の経験者であった。「教労」に関わりのない「純粹に新教だけ」のメンバーであった池田は、当初から非合法の活動に反対していた⁷⁴。池田は多くの教師が逮捕によって失職し、地域での居場所を失くし、妻子ともども路頭に迷ったことを、「運動による被害⁷⁵」という厳しい言葉で糾弾している。

見方を変えれば、浦辺もその「被害」を受けて、新興教育運動に身を投じ、組織内部でその組織矛盾に苦しんだ一人であった。

ただし、同じ教師経験者でも、増淵穰の手記や山口近治の手記からは、運動に向かう気持ちに迷

いがほとんど読み取れない。新興教育運動に携わった小学校教師経験者にも、二つのタイプがいたと考えられる。

4. 「文部省左傾学生生徒の手記」に見る浦辺の思想

1932年8月新興教育の中核メンバーが検挙され、浦辺は組織の機能を回復する任務を帯びて、書記長代理に就任した。浦辺が特別高等警察に捕らえられたのはその2か月後の10月であった。「文部省左傾学生生徒の手記 第二輯」に収録された「七一 著述業（元教員）R・X」という手記は、浦辺が勾留時に当局に求められて書いたものである。

この時期、新興教育運動及び「教労」の運動のために特別高等警察に捕らえられた多くの教員の手記の中から、浦辺のものが選ばれた意味は大きい。この「文部省左傾学生生徒の手記」に掲載された手記はほとんどが学生の手によるものが占める。浦辺の手記が選出された理由は、文部省が浦辺を特に注意を要する教師像として捉えたからではないか。この点は、浦辺の執筆記事7本のうち2本（「教育サークルと新興教育同盟」及び「自主的父兄委員会を作れ⁷⁶⁾」が文部省の『プロレタリア教育運動』に引用された理由とも共通していると考えられる。

柿沼（2006）は「文部省思想局左傾学生生徒の手記」（1934年）が「左傾学生」の思想動向を把握するための資料として編まれたものであるにも関わらず、元小学校教師の浦辺の手記が選ばれ掲載された理由を、文部省にとって浦辺の歩みが、当時の「教師の歩みを典型的に示すもの⁷⁷⁾であったからであると指摘している。

しかし、浦辺の存在は、新興教育運動に参加した教師の歩みとして決して「典型的」とはいえない。特別高等警察に捕らえられた元教師には浦辺より「典型的」な山口近治や増淵穰がいた。戦後に行われた新教懇話会の対談（1977年⁷⁸⁾での浦辺の言葉の少なさや戦後の手記『道づれ』（1982年）の「職業的」という記述からも、浦辺の新興教育運動における立ち位置は「典型的」とは言い難いのではないか。

浦辺の手記が「文部省思想局左傾学生生徒の手記」に選出されたのは、浦辺が「典型的」（柿沼、2006）であったからではなく、子どもの教育に情熱を抱く教師の普遍的な心情が綴られていたからではないか。「文部省思想局左傾学生生徒の手記 七一」（1934年）と教壇を追われた時の声明文「東京の同士諸君に訴う」（1931年⁷⁹⁾に綴られた浦辺の思いは、新興教育運動へ参加を複雑な思いを持って振り返る二人の教師、戸塚廉や前田卯門の手記と教育への情熱という点で酷似している。特別高等警察の逮捕によって教壇を追われた前田卯門の「小学校教師は子どもを離れてあり得ない」（前田、1956⁸⁰⁾という言葉と、浦辺が「文部省思想局左傾学生生徒の手記 七一」に綴った「児童の教育は生活の全部であり、全生命⁸¹⁾という言葉は同じ響きを放っている。戸塚廉が当時を振り返って綴った「貧困と搾取のない社会を作る⁸²⁾という切実な願いと、浦辺の声明文の「赤のレッテル⁸³⁾を貼られ逮捕される挫折感と疎外感、そして浦辺の「文部省思想局左傾学生生徒の手記 七一」にある不意転を命じられ子どもと引き離される時の「真に堪えざる苦痛⁸⁴⁾という叙述は、どれも子どもたちへの愛と教育への情熱から発出された言葉である。

浦辺も含めた、迷いや複雑な思いを抱えながら新興教育運動に参加した教師の手記が示すのは、教師たちがプロレタリア教育の理念で結ばれていたのではなく、子どもへの愛と新しい教育実践への情熱、周囲からの排斥による挫折と悲しみでつながっていたという事実である。

当局が恐れたのは、教師たちがプロレタリア教育によって結束することではない。特別高等警察

による大規模な検挙によって、当局は新興教育運動の内実を1932年の時点でほぼ把握していた。文部省思想局が警戒したのは、新興教育ではなく、浦辺の手記「文部省思想局左傾学生生徒の手記七一」に綴られた、教師たちの子どもへの素朴な愛と挫折、排斥による悲しみであろう。教師たちが子どもへの情愛によって結び合うことを恐れたのではないか。

「七一」手記の内容は以下の①～⑦の構成で綴られている。

- ①家庭関係
- ②学歴 「吃音のために常に友人や教師から侮辱される事多く」孤独な学生生活を送ったことが綴られている。
- ③職業経歴 ペスタロッチに憧れ、「明日の児童との営みを思うのが常」の日々を送ったが、現実の教育が理想とかけ離れていることに気づき「大きな失望が生じてきた」。
- ④思想推移の過程
- ⑤日本共産青年同盟の関係
- ⑥現在の思想並びに将来の決心

この手記で注目すべき点は、④でこの後の東京帝国大学セツルメントと天照園に続くアイデアが提示されているところである。浦辺は新興教育に入ってから読んだ教育書のなかの一冊としてヘルンレの『プロレタリア教育の根本問題』をあげ、「労働者農民は自身の手で其の児童青年を教育せねばならないと思った」と述べている。この「自身の手で」は、後の東京帝国大学セツルメント託児所の母の会の「自己教育」という構想の萌芽と考えられる。浦辺は、保母主導であった母の会を「勤労婦人の社会的教育」即ち母親たちの「自己教育」の機会とするべく、自立的な組織への改編を企図した⁸⁵。母の会の組織運営は、母親たちが共同の精神と対等な人間関係を身につける格好のチャンスとなり、母の会が開催する「講習会」「お勉強会」は自主的に学び合う場となった⁸⁶。つまり、母の会の「自己教育」は、当事者の自主的な啓蒙である。浦辺を「自己教育」に向かわせたのは、新興教育運動で知った知識層から大衆へ波及させる啓蒙の限界であった。知識層から発信する啓蒙は、日常の営みから逸脱し違和感を持って受け止められるため、大衆に浸透しない。この限界の超克には、当事者としての自覚化が必要であった。

5. まとめ

新興教育研究所時代において、東京帝国大学セツルメント託児所の保育実践に大きな影響を与えた事象は主に二つで、一つめは教育運動で経験した多くの挫折であり、二つめは新興教育運動を通して得た同セツルメントにつながる人脈である。

一つめの教育運動の挫折は、教師時代に突き当たった個人としての困難とは異なっていた。小学校における教育実践では、その遂行を阻むのは旧来のやり方を好む校長や視学という管理職であった。一方、教育運動を阻んだのは、当局の弾圧という外圧にくわえて、コアメンバーが急進的過ぎるために大衆から「浮かび上がる」という知識層からの啓蒙の限界や組織の運営方法など、組織に内在する問題であった。「貧農児童の教育⁸⁷」への思いから始まった浦辺の新興教育運動は、組織の内的問題による民主主義運動の停滞と、特別高等警察の苛烈な弾圧による組織の瓦解という二つの困難に挫かれた。しかし、知識層から大衆への啓蒙の限界を身を持って経験したことによって、浦辺は当事者による「自己教育」という新たな啓蒙の糸口を掴み、東京帝国大学セツルメントの保育実践では、「母の会」を通して具現化した。

二つめは、新興教育運動を通じた松永健哉、村島雄一、菅忠道たちとの邂逅と関わりである。東京帝国大学セツルメントの運営学生でもあった彼らは、新興教育運動への弾圧によって検挙された浦辺を、釈放後に東京帝国大学セツルメント専従職員として招き入れ「保育に開眼」させた。

浦辺は、新興教育運動を通して、生活と遊離した運動は長く続かないこと、対象が困窮していればいるほどメッセージが届かないという現実を知った。この浦辺は人々の共同による教育及び貧困克服を漠然と望んではいたものの、新興教育運動のなかでは、この考えを実現する具体的な方策は未だ掴めなかった。

本研究は浦辺史の執筆記事と新興教育研究所での活動を中心に取り上げたため、新興教育運動と無産者託児所運動の関係について触れることしか出来なかった。二つの運動の関係性は浦辺の次の活動の場である東京帝国大学セツルメントの保育を考察する上で、重要な視点である。

注

- 1 浦辺史・浦辺竹代『道づれ 新しい保育を求めて』草土文化、1982年5月、10頁
- 2 浦辺史・浦辺竹代『福祉の昭和史を生きて』草土文化、1994年6月、181頁
- 3 川田由太郎（浦辺史）「社会的目ざめ即失業」国分一太郎 編『石をもて追われるごとく』英宝社、1956年、157頁 ※『道づれ』68頁には「一九三一年十月頃」と書いてある。しかし『新興教育』に誌代送付先として「松本良夫（浦辺の変名）」が登場するのは1931年7月であるため、本研究では「社会的目ざめ即失業」に拠るものとする。
- 4 浦辺史「川田由太郎と新興教育運動」井野川潔・森谷清・柿沼肇 編『嵐の中の教育』1971年12月、新日本出版社、162頁
- 5 川田吉太郎（浦辺史）「何故浮び上るか」『新興教育』1931年9月・10月号、45-47頁
- 6 川村守三（浦辺史）「残された俺たち」『新興教育』1931年11月号、24-25頁
- 7 岡野正「日本教育運動史研究：1930年代の動向」『北海道大学教育学部紀要』1973年11月、第22号、123-173頁、および、『北海道大学教育学部紀要』1974年3月、第23号、187-245頁
- 8 柿沼肇『新興教育運動の研究』ミネルヴァ書房、1981年12月
- 9 文部省学生部『プロレタリア教育運動』1933年4月66頁
- 10 山口近治『治安維持法下の教育労働運動』新樹出版、1977年12月、223頁
- 11 柿沼肇「浦辺史と新興教育運動 —子ども・教員の解放と社会の変革をめざして—」『日本福祉大学社会福祉論集』第114号、2006年3月、1-32頁、10頁
- 12 浦辺史・浦辺竹代『道づれ 新しい保育を求めて』草土文化、1982年5月、68頁
- 13 前掲、山口近治『治安維持法下の教育労働運動』、220頁
- 14 浦辺は『道づれ』（1982年）で「1932年10月頃」に「新教にはいった」と記述しているが、『新興教育』には浦辺の新興教育研究所での変名である「松本良夫」（浦辺、1982）が7月号から登場する。本研究では浦辺が7月から所員として活動を開始していたものとする。
- 15 前掲、浦辺史・浦辺竹代『道づれ 新しい保育を求めて』、69頁
- 16 同前、69頁
- 17 浦辺史「川田由太郎と新興教育運動」井野川潔・森谷清・柿沼肇 編『嵐の中の教育』1971年12月、新日本出版社、157-162頁

- 18 山下徳治「新興教育の建設へ ——教育者の政治的疎外——」『新興教育』創刊号、1930年11月、4-15頁、14-15頁
- 19 同前
- 20 池田種生『プロレタリア教育の足跡』新樹出版、1971年8月、52頁
- 21 同前
- 22 前掲、浦辺史・浦辺竹代『道づれ 新しい保育を求めて』
- 23 浦辺史・増淵穰・菅忠道・塩谷アイ・小田真一 他「子どものいのちと発達をまもる保育運動 —浦辺さんを囲んで治安維持法下の活動をきく」『季刊教育運動研究』創刊号、1976年7月、132-171頁
- 24 R・X（浦辺史）「左傾学生生徒の手記 七一」文部省学生部『左傾学生生徒の手記第二輯』、1934年3月、317-323頁
- 25 浦辺史「行為なきを罰す —「保育問題研究会」活動への弾圧—」大槻健・寒川道夫・井野川潔 編『いばらの道をふみこえて』民衆社、1976年8月、186-195頁、194頁
- 26 前掲、浦辺史「川田由太郎と新興教育運動」、157-162頁
- 27 戸塚廉「新興教育同盟支部づくり」国分一太郎 編『石をもて追われるごとく』英宝社、1956年11月、60-80頁
- 28 前田卯門「教員組合をつくって」国分一太郎 編『石をもて追われるごとく』英宝社、1956年11月、81-94頁
- 29 前掲、池田種生『プロレタリア教育の足跡』
- 30 前掲、山口近治『治安維持法下の教育労働運動』
- 31 岡野正「日本教員組合運動史研究 -1920年代の動向- 1-」『北海道大學教育學部紀要』第18号、1971年3月、53-77頁
- 32 前掲、岡野正「日本教育運動史研究：1930年代の動向」
- 33 柿沼肇『新興教育運動の研究』ミネルヴァ書房、1981年12月
- 34 柿沼肇「浦辺史とその教員時代 —ペスタロッチへの傾倒から『教育労働者』へ」『日本福祉大学社会福祉論集』112号、2005年2月、1-23頁
- 35 柿沼肇「浦辺史と新興教育運動 —子ども・教員の解放と社会の変革をめざして—」『日本福祉大学社会福祉論集』第114号、2006年3月、1-32頁
- 36 前掲、岡野正「日本教育運動史研究：1930年代の動向」、206頁
- 37 『道づれ』には、1931年の「新興教育同盟準備会に移行してからは規約の上にも組織部を設けた」とある 67頁
- 38 前掲、池田種生『プロレタリア教育の足跡』、172頁
- 39 前掲、浦辺史・浦辺竹代『道づれ』、67頁
- 40 前掲、柿沼肇「浦辺史と新興教育運動 —子ども・教員の解放と社会の変革をめざして—」、10頁
- 41 文部省学生部「教育労働者組合運動との関係」『プロレタリア教育運動 上』1933年4月、140頁
- 42 前掲、浦辺史・浦辺竹代『道づれ 新しい保育を求めて』、67頁
- 43 同前、70頁

- 44 同前、88 頁
- 45 浦辺史『日本保育運動小史』1969 年 5 月、風媒社、16 頁
- 46 前掲、浦辺史・浦辺竹代『道づれ 新しい保育を求めて』、70 頁
- 47 井野川潔「〈入門講座〉運動史解説②「新教」の教育運動」『新興教育復刻版月報』No.2、白石書店、1975 年 5 月、4-10 頁、7 頁
- 48 同前
- 49 前掲、川村守三（浦辺史）「残された俺たち」
- 50 前掲、R・X（浦辺史）「左傾学生生徒の手記 七一」、321 頁
- 51 同前、321 頁
- 52 大野健一（浦辺史）「二いろの先生」『ピオニール・トクホン』第一輯（1932 年 2 月）6-52 頁、49 頁
- 53 前掲、川田由太郎（浦辺史）「社会的目ざめ即失業」、54 頁
- 54 前掲、浦辺史・浦辺竹代『道づれ 新しい保育を求めて』、66 頁
- 55 前掲、浦辺史「東京の同土諸君に訴う」
- 56 前掲、柿沼肇「浦辺史とその教員時代 ペスタロッチへの傾倒から『教育労働者』へ」、6 頁
- 57 前掲、文部省学生部『プロレタリア教育運動』、104 頁
- 58 同前、104 頁
- 59 前掲、浦辺史・浦辺竹代『道づれ 新しい保育を求めて』
- 60 前掲、浦辺史「川田由太郎と新興教育運動」、161 頁
- 61 前掲、浦辺史・浦辺竹代『道づれ 新しい保育を求めて』、68 頁
- 62 前掲、池田種生『プロレタリア教育の足跡』、101 頁
- 63 同前、99 頁
- 64 前掲、前田卯門「教員組合をつくって」、94 頁
- 65 前掲、池田種生『プロレタリア教育の足跡』、99 頁
- 66 帆足計「新興教育のあけぼの」『嵐の中の教育』、1971 年 12 月、新日本選書、149-156 頁、152 頁
- 67 前掲、宮原誠一「教育への反逆 —新教・教労の活動へ—」、148 頁
- 68 前掲、帆足計「新興教育のあけぼの」、152 頁
- 69 井野川潔「編者のことば」池田種生『プロレタリア教育の足跡』所収 478-482、1971 年 8 月、479 頁
- 70 「新興教育懇話会」（1959 年結成）の井野川潔、増淵穰などは新興教育運動を「抵抗運動」として社会的意義を高く評価する見地になつた。
- 71 国分一太郎『『生活綴方』の運動と『生活学校』の運動』『教育』、1952 年 3 月、教育科学研究所、18-27 頁
- 72 駒林邦夫「プロレタリア教育運動」小川太郎・海後勝雄・駒田守一・国分一太郎他 編『明治図書講座 学校教育 2 日本教育の遺産』所収、1957 年、125-154 頁
- 73 柿沼肇「教育運動史の歩み —教育運動史研究会の活動に即して（上）—」『日本福祉大学研究紀要 —現代と文化』、2014 年、第 130 号 9 月、77-116 頁、111 頁
- 74 前掲、池田種生『プロレタリア教育の足跡』、142 頁

- ⁷⁵ 前掲、池田種生『プロレタリア教育の足跡』、96頁
- ⁷⁶ 浦辺史「自主的父兄委員会を作れ」全協日本一般使用人組合労働部機関紙『教育労働者版』1932年1月14日発行 ※文部省（1933）『プロレタリア教育運動』、105頁で確認（機関誌は存在を確認できず）
- ⁷⁷ 前掲、柿沼肇「浦辺史と新興教育運動 —子ども・教員の解放と社会の変革をめざして—」、30頁
- ⁷⁸ 岩代輝明・上田唯郎・浦辺史・小田真一「治安維持法下の教育労働運動」山口近治『治安維持法下の教育労働運動』新樹出版、1977年12月、207-251頁
- ⁷⁹ 前掲、浦辺史「東京の同志諸君に訴う」
- ⁸⁰ 同前、94頁
- ⁸¹ 前掲、浦辺史「東京の同志諸君に訴う」
- ⁸² 前掲、戸塚廉「[新興教育同盟]支部づくり」、60頁
- ⁸³ 前掲、浦辺史「東京の同志諸君に訴う」
- ⁸⁴ 前掲、R・X（浦辺史）「左傾学生生徒の手記 七一」、319頁
- ⁸⁵ 保育研究部（浦辺史）「母の会の組織と活動について」『児童学研究』第1巻第5号、1933年11月12月号、25-30頁
- ⁸⁶ 「託児部史 九、母の會」東京帝国大学セツルメント『東京帝国大学セツルメント十二年史』1937年2月、71頁
- ⁸⁷ 前掲、R・X（浦辺史）「左傾学生生徒の手記 七一」